

St. Luke's International University Repository

修士課程国際看護学開講の経緯と学部一貫のコース展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田代, 順子, 長松, 康子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1302

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



修士課程国際看護学開講の経緯と学部一貫のコース展開

田代 順子¹⁾ 長松 康子¹⁾

Starting a Master Course and Consistent Development of Baccalaureate Course in “International Nursing” at St. Luke’s College of Nursing

Junko TASHIRO, RN, MW, PHN, MA, PhD¹⁾ Yasuko NAGAMATSU, RN, PHN, MPH¹⁾

[Abstract]

In April, 2005, St. Luke’s College of Nursing, Master in Nursing Science (MNS) started an “International Nursing” course. This course was designed based on outcomes of a study regarding competencies of Japanese international nursing collaborators. The educational goal of this course is to strengthen competencies of Japanese nurse’s or midwife’s in the area of international collaborative work in developing countries. Some subjects relating to International Nursing in our Baccalaureate Program (BNS) began in 1994. With the advent of MNS International Nursing Course the international program is now more progressive and consistent from pre-graduate to the graduate program. BNS program consists of four subjects: Introduction of International Nursing as a part of introduction of community nursing; Seminar on International Nursing, a part of the Nursing Seminar; Practicum on International Nursing; and Nursing Research II or Comprehensive Nursing, to write a thesis or a report on practice based on each student’s interest. The MNS in International Nursing consists of seven subjects: International Nursing I, as an introduction course of International Nursing focusing on issues and strategies of global health; International Nursing Seminar I, assessing the health system of the focused country of each graduate student; International Nursing II, seminar on exchanging each assessment of health system and issues of several focused countries; International Seminar II, assessing, planning, and implementing an international collaborative project for an ongoing project in the northern Pakistan; International III and Practicum III focusing on literature review of the targeted health issues and each graduate student develops a proposal. Progress of this course will be monitored through class evaluations.

[Key words] International Nursing, course outline,
consistent development from Baccalaureate to master program

[要 旨]

2005年度から、修士課程に「国際看護学」コースを開講した。この修士課程では、日本の看護職者が、開発途上国の看護・助産開発の専門的協働者としての能力を養うことを教育目標としている。この修士課程が開講し、学部での国際看護の科目と合わせて、国際看護の系統的教育プログラムの基礎ができたと考える。学部2年生の地域看護論Ⅰで、国際保健協力を紹介し、4年生の選択看護ゼミ（国際看護）・総合実習（タイ、マヒドン大学）で、学生の異文化理解と保健システムについて理解を広げている。修士課程では、異文化での看護活動の経験者に対して、焦点を当てている国での特定課題の協働を過程（アセスメント・協働計画、実践、評価）に沿って活動できる能力育成のため、特論および演習Ⅰ・Ⅱを開講し、さらに、特論・演習Ⅲで、各人の焦点国を分析し、演習Ⅲで研究計画書を作成し、特別看護研究を行う。2006年で修士課程の最初の修了生を送り出す。今後、修了生の活動をモニターし、さらにコースを発展させていく計画である。

[キーワード] 国際看護学、コース展開、学部から修士への一貫開発

I. はじめに

2005年4月、聖路加看護大学大学院修士課程に国際看護学を開講し、2名の修士課程院生を受け入れ、2006年に1名の院生と博士課程院生1名を受け入れて、大学院課程での国際看護学コースが進んでいる。この大学院修士課程は、2002-2004年度（平成14-16年度）に国際医療協力研究委託費を受けて行った、「開発途上国における看護技術移転教育プログラムの開発に関する研究」の中で、聖路加看護大学分担任が行った「国際看護専門看護師教育プログラムの開発研究」の成果を基に、コースを計画し、運用している。この研究で、将来にわたって、国際保健・看護の領域で貢献できる看護職の必要とする能力とその系統的教育指針を提示したことにより、これまで行ってきた学部教育での国際看護の教科内容を見直し、新たに修士課程の教育の理念と内容が計画できたと考えている。いまだ国際看護学領域の学部課程での教育内容・方法および修士課程の教育内容・方法は発展段階で、さらに博士課程での教育開発の必要があるが、今後の発展のためのベースラインとして、国際看護学開講の経緯と学部一貫のコース展開に関して記述したい。

本稿では、国際看護学開講の基盤となっている『国際

看護専門職に必要とされる能力とその能力育成のための系統的教育プログラム開発研究』の成果概要と、聖路加看護大学学部の国際看護関連科目内容、大学院修士課程のコース内容とその教育方法に関して記述する。

II. 国際看護専門職が必要とする能力とその系統的教育プログラム開発研究

研究の目的は、看護開発を目指している開発途上国の国々への有効な看護技術移転あるいは協力に関わる国際看護専門家（国際看護コラボレーター）を育成するための卒前から卒業までの特に、現任・継続教育、および大学院修士レベル（国際看護専門看護師プログラム）の人材育成あるいは教育プログラム開発をすることであった。その背景として、日本は国際開発において世界第2位の援助国であり、1960年代から、多くの日本の看護職は看護開発のための看護技術移転に関わってきた。しかしながら、日本の看護師の異文化での看護開発支援のための看護技術移転の研究は限られ、日本の看護職のための系統的な卒業教育は不十分であるといえる。今日、国際間の医療・保健・看護の協力・協働が促進される中で、より効果的な働きができるように、卒前から卒業の系統的

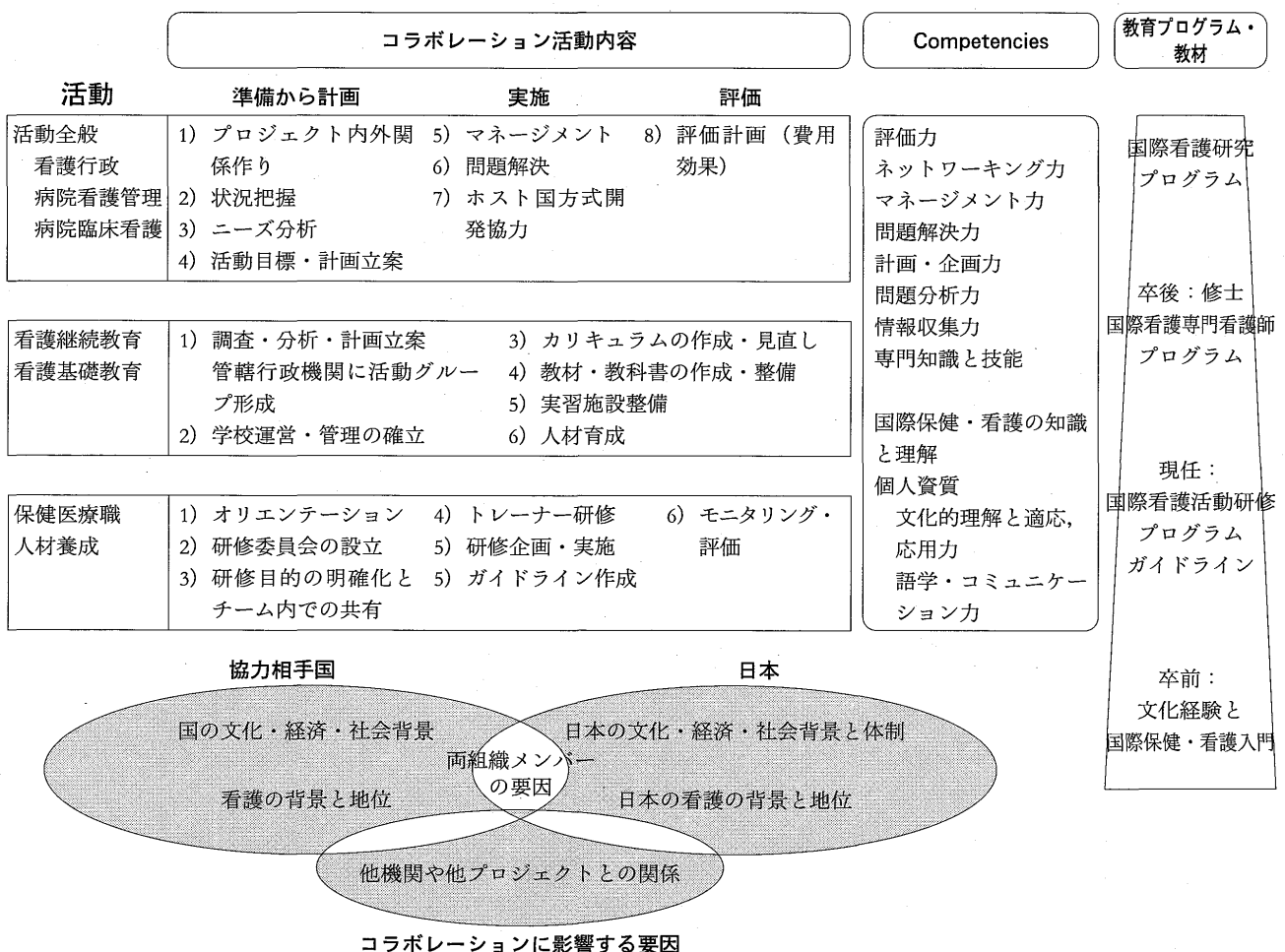


図1 開発途上国で看護技術移転・協力活動内容と必要な能力、系統的教育プログラム

表1 国際看護学（学士・修士課程）科目一覧と進め方

学部

年次	期	科目名 (教授方法)	単位	コース概要／コース展開
2年次	後期	地域看護論Ⅰ 「海外で働く看護職のはたらき」	1コマ	世界の健康問題や海外における看護活動について学ぶことで、海外における看護活動について興味を深める
4年次	前期	看護ゼミナール 国際看護	1	途上国における健康問題について理解を深め、わが国の国際協力と国際的活動における看護職の役割について学ぶ
	夏休み	総合看護実習	2	タイ・マヒドン大学シリラート校に3週間留学し、タイのヘルスシステム、健康問題、看護教育などを学び、地域看護活動に参加する
	後期	看護研究Ⅱ 総合看護：国際看護	3	各自が選んだ国とテーマについて、文献検討、研究計画、調査、分析、論文作成を行うことにより、系統的な研究的思考を養う

修士課程

年次	期	科目名 (教授方法)	単位	コース概要／コース展開
1年次	前期	国際看護学特論Ⅰ (講義・セミナー)	2	国際間の健康格差を認識し、国連ミレニアム開発目標を共有し、現在進んでいるグローバル・ヘルスへの取り組みを理解する。加えて、各受講生のグローバル・ヘルスの問題意識を明確にする
		国際看護学演習Ⅰ (セミナー)	2	各受講生が焦点を当てる国の概要、健康状況・システムに関する情報から焦点国の健康・看護課題のアセスメントをし、課題抽出する
	後期	国際看護学特論Ⅱ (講義・セミナー)	2	開発途上国の焦点国のグローバル・保健・看護システム上の課題および政策・施策をさまざまな視点から比較・分析アプローチを学ぶ
		国際看護学演習Ⅱ (国際協働実習)	2	異文化の開発途上国での保健・協働プロジェクトに参加し、開発のための協働プロセスからグローバル・ヘルスの課題、改善の国際協働活動について学ぶ
		国際看護学特論Ⅲ (チュートリアル)	2	各受講生の焦点国の焦点化する健康・看護問題に関する研究文献をレビューを統合的に検討し、研究課題を明確にする
2年次	前期	国際看護学演習Ⅲ (チュートリアル) 特別看護研究 (データ収集)	2	各受講生の焦点国の焦点化する看護の研究課題への研究計画書を作成する 《研究・研究倫理審査》 焦点国でのデータ収集
	後期			データ分析 論文作成 《論文審査》 修了

教育プログラムの開発が必要であった。

研究は2002（平成14）年度から2004（平成16）年度まで段階的に進められた。

2002年度：国際看護協力専門家の協力過程上の諸問題、必要とする能力と継続学習ニーズ調査、現地調査を行った。

2003年度：前年度調査・追調査（総計54名の面接調査）とその分析を基に系統的教育指針案、各カリキュラム試案、教育内容・教材案を作成した。それらの試案を海外の国際協力・協働専門家とのワークショップで洗練した。

2004年度：試案を英・米・日本の国際医療協力関連の教育プログラムと比較検討し、開発途上国で看護技術移転・協力に必要な能力と系統的教育プログラムの概念モデル（図1）を開発した。その後、教育指針案、カリキュラム案（モデルカリキュラムとして教育内容・方法を含む）を作成した。

2005年度に、この教育指針案を基礎に聖路加看護大学大学院修士課程を開講し、同時に、学部で開講していた

2年次での地域看護学概論での国際看護学概論（1コマ）に加えて、国際看護関連の教育内容を拡大し、4年次の国際看護学実習を地域看護学の総合実習の一部として開始した。また、看護研究Ⅱで、総合看護実習での内容を研究レポートとしてまとめられるようコースを整理した。これらの科目の一覧表を示す（表1）。

Ⅲ. 学部における国際看護学教育

1. 教育の主眼

学部学生には、将来において国際看護専門家として国際保健に貢献できる基礎的能力と考えられた、異文化理解・経験・コミュニケーション力の強化と国際保健・看護学のオリエンテーションを主眼として、コースを計画している。

2. 国際看護関連科目

学部の国際看護関連科目は4科目ある。地域看護論1の

一部、看護ゼミ：国際看護学，総合看護実習：国際看護，看護研究Ⅱまたは総合看護：国際看護学である（表1）。

1) 地域看護論Ⅰ：地域看護の実践の場での看護職の役割，海外で活動する看護職のはたらき（2学年生対象，1コマ）

科目目標：地域看護の実践の場の1つとして，海外における看護活動について興味を深める。

教授方法：視聴覚教材を使用して，世界国々の健康問題を示し，看護職として可能な活動や，そのために必要なスキルについてディカッションを行う。

2) 看護ゼミナール：国際看護（4学年生対象，1単位）

科目目標：途上国における健康問題について理解を深めた上で，わが国の国際協力事業について学び，国際的活動における看護職の役割について理解を深める。

教授方法：①乳幼児死亡率，予防接種，HIV，結核，プライマリ・ヘルスケアなどの概念の中からテーマを選んで自己学習し，グループごとに発表する。②JICA見学・講義の後，ディスカッションを行い，途上国における看護職の役割についてディスカッションを行う。③タイ・韓国他からの留学生と合同で，それぞれの国のヘルスシステムと健康問題を調べ，英語で発表しあう。

3) 総合看護実習（4学年生対象，2単位）

科目目標：日本とタイにおけるヘルスシステムを比較することによって，日本のヘルスシステムとその特徴や共通点，相違点を理解する。

教授方法：タイ・マヒドン大学シリラート校に3週間留学し，タイのヘルスシステム，健康問題，看護教育，地域保健活動を学ぶ。地域活動に積極的に参加し，人々の暮らしや文化に触れる。実習の最後に在宅介護，看護クリニックにおいてボランティア活動を行う。実習成果はマヒドン大学地域看護学教室において発表する。講義・発表・実習は全て英語で行う。

4) 看護研究Ⅱ，総合看護：国際看護（4学年生対象，3単位）

科目目標：グローバルな視野において看護に関連するテーマを選び，系統的に探求し，主体的に取り組む体験を通して，研究的思考を養う。

教授方法：それぞれが選んだ国とテーマについて，文献検討，研究計画，調査，分析，論文作成を行う。今年度のテーマは「子どもの権利から見たストリートチルドレン」「タイ・都市部におけるヘルスボランティアの力量と活動内容」「わが国における外国人向けホームページ医療情報についての実態調査」「幼稚園児を持つ在日外国人母の育児支援についての調査」「タイのメンタルヘルスにおけるタイ仏教の役割」などである。

IV. 修士課程における国際看護学

1. 教育の主眼

修士課程の国際看護学では，将来，院生が開発途上国での看護・助産領域での協働プロジェクトで活動できる専門・基礎的能力を養えるように科目を設定した。しかしながら，開講に先行した日本の国際看護専門職に関する研究で示されたように，国際看護の協働活動の分野は広く，看護行政，看護教育（卒前・卒後課程），看護管理，臨床看護技術移転，地域看護，看護研究，職能団体支援など多様で，国際看護学は応用看護学と考えられた。したがって，受講生の焦点国での焦点領域に沿って，学修できるようコース展開を計画した。基本的には，すでに青年海外協力隊などで開発途上国でのボランティアとして協働経験のある看護職で，開発途上国の中で焦点国と看護の領域での専門領域を持ち，将来的に専門家として国際協働に関わりたい意思を持っている希望者に学修の機会を提供できるように計画した。加えて，国際協働に必要な英語でのコミュニケーション力の強化を国際看護学の教育課題のひとつとして計画し，米国の国際看護を専門とする客員教授（2005-2006年度はコロンビア大学看護学部の Dr. Richard Garfield）を迎えている。

2. 国際看護学の科目

国際看護学は他領域と同様，特論科目3科目，演習3科目の6科目（各2単位）で構成され，異文化の開発途上のホスト国での国際看護協働活動のための過程（アセスメント，協働計画，協働実践，評価）を実践し，看護課題に対して，特別看護研究ができる能力を養えるようにコース展開している。国際看護学の科目と進め方概要の一覧は表1に示す通りある（表1）。

1) 国際看護学特論Ⅰ（2単位・30時間）

科目目標：受講生が，国際間の健康格差を認識し，国連ミレニアム開発目標を共有し，現在進んでいるグローバル・ヘルスへの様々な国際機関，国際協力機関，非政府機関の取り組みを理解する。加えて，各受講生は，グローバル・ヘルスの問題意識を明確にする。

教授方法：受講生の焦点国と焦点領域を考慮しながら，国際看護の専門職として備えるべき基本的知識（国際保健学的，疫学的知識）について，英語のテキストを講読しその関連情報を分析する。また，客員教授から，疫学を基盤としたグローバル・ヘルスの講義を受ける。

2) 国際看護学演習Ⅰ（2単位・60時間）

科目目標：各受講生が焦点を当てる国の概要（プロフィール），健康状況・システムに関する情報収集と分析から，焦点国の健康・看護課題のアセスメントし，課題を抽出する。

教授方法：各受講生の焦点国，焦点領域の既存情報の収集方法，分析方法のガイダンスの後，各院生の進捗に応じて，チュートリアル方式を進める。加えて，院生はこの演習課題を，国際看護学特論Ⅱで，プレゼンテーションし，討議するため，この演習課題は英語でのプレゼンテーション，資料作成を行うよう指導される。

3) 国際看護学特論Ⅱ (2単位・30時間)

本特論は2つのセクションに分けられ，前半セクションの5コマは国際保健システム比較論の集中セミナーとなる。

科目目標(1)：各院生が焦点を当てた開発途上国のグローバル・保健・看護システム上の課題および政策・施策を英語で発表し，受講生および客員教授とのセミナーで，さまざまな視点から比較・分析アプローチを学び，英語での専門的コミュニケーション力を養う。

科目目標(2)：この科目の後半のセクションでは，国際看護学演習Ⅱでフィールドワークをする国の保健システム分析で看護課題のアセスメントをし，実習目的，目標を明確にする。2005・2006年度は，パキスタン北部地震の救援協働活動，その後の地域復興の保健人材育成の協働ボランティアに関わる事前分析とその協働計画をした。

授業方法：セミナーでの英語でのプレゼンテーションと討議で，保健システム，保健・看護課題の比較分析を準備コースと考え，フィールドの国・地域の分析と活動計画を指導者とともに行う。

4) 国際看護学演習Ⅱ (2単位，60時間)

科目目標：異文化の開発途上国での保健・協働プロジェクトに参加し，開発のための協働プロセスからグローバル・ヘルスの課題，改善のための国際協働活動について学ぶ。

授業方法：開発途上国で行われている，国際協働のフィールド・ワークに参加し，サービス・ラーニングのアプローチを基礎として，実際の活動の記録(日誌)，ミーティングでの振り返りの中で，学びを深める。2005・2006年度は，パキスタン北部地震の救援協働活動，その後の地域復興の保健人材育成の協働ボランティアに関わり，記録，ディスカッション，まとめのプレゼンテーション，報告書作成を通じて学んだ。

5) 国際看護学特論Ⅲ (2単位，30時間)

科目目標：各受講生の焦点国の焦点化する健康・看護問題に関する研究文献レビューを統合的に検討し，研究課題を明確にする。

授業方法：個人チュートリアル(指導)で，文献レビューを通じ，特別看護研究の理論的根拠，および研究方法のクリティークにより，研究方法を吟味する。

6) 国際看護学演習Ⅲ (2単位，60時間)

科目目標：各受講生の焦点国の焦点化する看護の研

究課題への文献検討を基に特別看護研究の研究計画書を作成する。

授業方法：個人チュートリアルで，特別看護研究の第1章序論，第2章文献検討，第3章研究方法を研究の倫理的配慮を含んで計画する。

これらの国際看護学演習Ⅲで作成した計画書は，事前に焦点国でのカウンターパートからの研究承認，あるいは研究倫理審査の承認を受け，本学大学院の研究科委員会・研究倫理審査委員会で承認されて，特別看護研究につながり，焦点国でのデータ収集が開始される。特別看護研究は，データ収集の後，分析，論文作成と，個人指導によって完成し，研究科委員会へ論文提出となる。その後，論文審査ならびに最終試験に合格することにより，修士号が授与され修了する。

本国際看護学のコースにおいて，これらの科目を積み上げることにより，国際看護協働のための相手国・保健システムアセスメントと協働目標，計画，実施，評価をできる基礎的能力を養うとともに，研究をベースに，看護・助産・保健分野での開発協働を提案できる能力を養う。

V. 今後の課題と方策

現在，国際看護協働の領域では，協働者自らが，カウンターパートとともに，協働プロジェクト計画を国際協力機関あるいは助成金を提供する機関に提出し，補助金を受け，協働プロジェクトを開始するような動向となっている。この国際看護学の修士課程修了者が，プロジェクトを計画ようになるためには，その後のフィールド経験や，博士課程でのさらなる知識基盤の確立，プロジェクトマネジメントに関する能力などが要求される。現在，2006年度に博士課程の院生を迎え，博士課程レベルでの国際看護学に関して，グローバルレベルの国際協働者としての能力開発のためのカリキュラムは，現在進行中の課題である。修士課程の2005年度入学生は論文を作成し，NGOの国際協力団体のワーカーとして派遣準備中である。修了生のその後のモニターをしながら，課程で学べたこと，強化すべき内容を整理し，コース展開を改善していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 田代順子ほか. 開発途上国における看護技術移転教育プログラムの開発に関する研究 2002年度-2004年度研究報告書. 2005.
- 2) 田代順子, 酒井昌子, 佐居由美, 堀内成子, 鈴木良美. 英国と日本における国際保健・看護関連教育プログラム: 調査報告. 聖路加看護大学紀要. No. 31, 2005, 56-60.